



THE GOSPEL NEWS

在日大韓基督教会
宣教110~120周年
標語

共に生きる
いのちの天幕を
広げよう

1963年9月20日 第3種郵便物認可 (毎月一日発行)

2020年11月1日 (日) 第800号

発行所 福音新聞社 (1部100円)
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3202-5398 info@kccj.jp
発行人/ 趙永哲・編集人/ 金柄鎬

印刷所 青丘文化社

秋収感謝節
説教

どんなことにも感謝しなさい

＜デサロニケの信徒への手紙—5:1＞



蔡銀淑 牧師 (大垣教会)

感謝祭の由来は次のとおりです。英国王が宗教の首長になって作られた英国国教、すなわち聖公会に服従することを強要されたピューリタン人たちはこれを拒否し、信仰の自由を求めてアメリカに移住します。102人が英国を去り航海中1人が死亡し、66日の航海の末、米国の北部、マサチューセッツ州に定着します。しかし、厳しい寒さに食糧も冬服も不足してほとんどの人が肺結核と風邪にかかり、また異国の地の風土病にもかかって、彼らが米国に到着した翌年の2月になってみると101人のうち半数が死亡していました。

しかし、飢えや病気に苦しんでいる彼らを助けてくれる人がいたのです。インディアン原住民でした。原住民ワンパノアグ族は、互いに侵害しない不可侵条約を結んで、彼らに食べ物と着るものを与え、トウモロコシ、大麦、小麦、ジャガイモ、カボチャ、トマトなどを栽培する方法を教え、また魚を取る方法も教えてくれました。そして、秋を迎えて穀物を収穫し、神に感謝をささげ収穫を祝う時に、ワンパノアグ族を招待します。ワンパノアグ族は鹿と七面鳥の肉を持ってきて共に祝ってくれました。この時が11月の最終木曜日だったのでこれを公式の感謝祭の起源としています。

このように感謝祭の由来を調べてみると、最初にささげた感謝祭は、穀物や果物の収穫を感謝する以上の意味を持っていることがわかります。ピューリタン人たちは命をかけて信仰の自由を求めてアメリカに移住し、ただ神だけ敬うと考え渡ったはずが、異国の地で毎日のように死んでいく仲間たちを目の当たりにしました。しかし、彼らは神への信頼を失いませんでした。また、神が自分たちを顧みてくださるという信仰を捨てませんでした。なので、彼らが最初にささげた感謝祭は、苦難と試練の中でも守り貫いてきた信仰の礼拝であり、彼らを顧みてくださった神へ感謝する礼拝だったのです。感謝と感激の中に悲壮さがにじみ出る収穫感謝礼拝だったと思います。

すべてが順調に進む時には誰でも感謝することができます。仕事がうまく運び、嬉しいことが次々と生じると感謝しない人はいません。しかし、都合が悪い時、仕事がうまくいかない時、問題の中にいる時や、苦難や困難の中にいる時に感謝することは難しいことです。

最近のように、社会全体に憂鬱感と無気力感に満ちた時

は近年なかったように思います。人々は強制的に移動を制限され、まるで自宅軟禁を受けている気分ですし、景気後退で倒産のリスクと生計の脅威を受ける方は、言葉にならない焦燥した夜を明かしていることでしょう。コロナ禍がいつ終息するか誰にもわからないという事実に挫折し、ワクチンが開発され流通するのをひたすら待つだけということに無力感を感じます。コロナに感染しても症状が表に現れない無症状の感染者が街を闊歩していると考え、知らない人は無条件避けて遠ざける、人への信頼は完全に崩壊しました。これから迎えるニューノーマル時代にどのように対処すればいいのか漠然とするだけです。

しかし、聖書は、「どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」と言われます。ここで重要な言葉は「どんなことにも」です。「どんなことにも」というのは良い状況だけでなく、悪い状況も含まれます。私たちが望んでいない状況も含まれます。神様は良くない状況でも感謝することを望んでおられます。目の前が真っ暗な絶望の状況でも感謝することを望んでおられます。しかしこれには、すべてのことを司り治める方が神様であることを信じる信仰が必要です。私たちが理解できない苦難や、説明できない困難の中から感謝するのは神様にたいする絶対的な信頼がないと不可能です。

聖書の中で説明できない苦難をうけた人といえばヨブとヨセフがいます。私たちの周りにいらっしゃる先生たちの中でも、理解できない苦難を括りぬけた方たちがいます。その方たちが言葉に現わすことの出来ない苦難を乗り越えられてきたのは、神様に対する絶対的な信頼があったからだだと思います。

私たちが愛し、導いてくださる神様に感謝しましょう。私達の人生において良くないことが起きても、主が私達と共におられることを信じる信仰で感謝しましょう。私達には問題の解決方法や答えはないが、私達の人生を顧みてくださる方が主であることを信じる信仰で感謝しましょう。たとえ目には見えないとしても、主の御手が私達を捕らえていることを信じる信仰で感謝しましょう。どんなことにおいても、私達に向けられた主の御心が善であることを信じる信仰で感謝しましょう。

韓日対照讃頌歌販売



韓国の新讃頌歌版です。交読文も韓日対照で掲載されています。

- B6版変型・1483ページ
- 価格: 2,500円(消費税・送料込み)
- ※お求めは総会事務所へ

讃頌歌委員会より「子どもさんびか」が発行されました。

主の祈り・使徒信条・交読文・十戒 集録
(いずれも韓国語・日本語)
一冊1,000円
お問い合わせは総会事務局へ
電話 03-3202-5398



特集 新型コロナ19の感染危機と教会礼拝現状

関東地方会 山形ウリ教会

李明信牧師

防疫に忠実に対処しながら主日礼拝を捧げています。手の消毒とマスク着用を義務化しています。講壇と信徒席の間にアクリル板を設置しています。各個人の体温をチェックして記録し、距離を置いて着席し、聖歌隊は行わず礼拝しています。

すべての会議はZOOMで行われています。そして、報告資料は掲示板に掲示しておきます。礼拝に参加できない信徒には説教ファイルを送り、電話相談し、そして働いている現場に行って寄り添っています。信徒たちの主な働き場である果樹園や田畑で会話の場を持ち、礼拝堂での不足している交わりを補っています。

コロナ19は人間の考えを超えて、神の摂理に目を向けなければならぬと思います。礼拝堂礼拝を越えて毎日毎分、生活のすべての場で礼拝を捧げているようにしていると考えることができます。

関東地方会 東京中央教会

張承権牧師

堂会と諸職、すべての信徒が、コロナ19の危機を克服するために、多様な方法を論じ合い実施しています。

社会的な距離を置くことを含めたK-防疫の活動と、現場及びオンライン礼拝の並行、交わりと食事等は一次的に中断していることは、他の教会と同じです。ただ、海外及び国内宣教が委縮することが無いよう、新しく支援を広げました。インドのMumbai (ムンバイ:旧ボンベイ) のBadlapur (バンドラプル) 地域にSAFE PACK (伝道紙、マスク、栄養剤等、約10個の品目を揃えたプレゼント) を制作し配布する、地域長期支援を始めました。在日大韓基督教会に属している教会と属していない教会、それぞれと定期支援を始めました。

苦しい状況ですが、この時こそより力を尽くして支援を広げることが、神様に喜ばれる教会の在り方であることに全教員が同意し、最善を尽くして参加しています。

関東地方会 愛の伝道所

李惠淑牧師

教会の特性上、インターネットで礼拝を行うということができないので、対面礼拝を行っています。しかし、食事とすべての交わりは控えています。ハンゲル教室も休んでいて、ただ礼拝と聖書勉強会だけは行っています。

礼拝に出席する信徒は、手の消毒とマスク着用と体温チェックを通じて、徹底した防疫に努めています。

コロナを恐れて出てこない人数が50%になっている中でも驚くべきことは、このコロナ時代にも、神は休まず救援すべき者を救われるということを見えています。また礼拝出席者も回復しています。

関東地方会 東京調布教会

丁奎華牧師

設立70周年を迎えている本教会は、3月に入って東京のコロナ19の蔓延により、信徒たちの中から教会に来ることが怖いという言葉が聞かれました。4月に入って、日本政府の非常事態宣言により、教会は映像での主日礼拝に加え、水曜日の聖書研究も金曜祈禱会も、映像で始めました。

5月31日の主日礼拝を礼拝回復の週と定め、教会で現場礼拝に復帰しましたが、多くの信徒がいまだ礼拝を休んでいます。それにもかかわらず新しい家庭が教会に導かれて、私たち教会は伝道についても挑戦しています。

信者たちには毎日の御言葉をまとも、教会のカカオトークに上げ、その御ことばを黙想をしていただき、また個人の聖書研究の教材を配布して、自宅で読んで提出していただくことも並行しています。

関東地方会 横須賀教会

金迅野牧師

以前は、20名～25名ほどの礼拝参加者がありましたが、韓国や米国に帰国されたご家族があったために、礼拝をまもる人数は減っています。併せてコロナ禍のために休業状態に追い込まれた方などもいます。諸職会で討議し、対面礼拝は維持することにする一方、職場からの指示などで対面礼拝に参加できない方々のためにzoomで同時に礼拝に参加できるようにしました。

現状では、対面、zoom併せて20名ほどの信徒が参加しています。対面は、対面とzoomの併用で進めていくことになると思います。

月2回開催していた賛美礼拝も中止に追い込まれましたが、前向きな取り組みもしたいとの声があがり、10月からは隔週で聖書フォーラムを開催することとしました。対面に来られない信徒が献金を送ってくださるなど、信徒のみなさんの熱意で財政状況も大きく悪化はしていません。様々な方々のお支えに感謝します。

関西地方会 奈良教会

姜宇烈牧師

3月にコロナ事態が始まって以来、電車を利用する遠距離からの信徒は礼拝に来られなくなり、近くにいる信徒たちのみ教会に集まって礼拝をささげました。

礼拝の前と後、教会の内外を消毒し、礼拝堂に入るときはマスクをし、消毒ジェルを手塗りにしていますし、礼拝後には食事の代わりにゆで卵を配っています。6月からは韓国語教室で9人の授業を始め、また、長い間教会に出席できていない信徒を尋訪して励ましています。

西南地方会 折尾教会

金承熙牧師

4月12日復活節礼拝は教会の礼拝堂にて行いましたが、緊急事態宣言に伴い4月19日から5月3日までの3週間は主日礼拝の週報と説教原稿を事前に信徒宅へ送付し、各家庭にてそれぞれ礼拝を行うようにしました。そして、5月10日主日より通常通りの礼拝を再開しました。

しかし、新型コロナウイルス感染を徹底的に防ぐため、教会では牧師も全信徒も必ず常時、マスクを着用し、教会に入るとまず石鹸、あるいは消毒液で殺菌し、適切な社会的距離を置き、換気のため礼拝堂や隣接する部屋の仕切り扉を全開して危機管理をしています。講壇上でもアクリル板を設置するなど、全体的に極力、飛沫を避けるようにしています。

また、昼食や交流会などは行わず、他教会との活動や行事なども全て中止となっています。

西南地方会 福岡中央教会

辛治善牧師

3月から主日午後礼拝、子供礼拝、青年会礼拝を中断し、新型コロナウイルスの拡散の深刻化した4月12日から5月20日まで主日礼拝を家庭礼拝に転換しました。5月24日から主日午前礼拝と水曜日礼拝、早朝礼拝は通常通り捧げています。

礼拝時はマスクを着用させ、主日礼拝前の出席名簿の作成及び、発熱チェック、礼拝前後の教会の消毒、礼拝時の一定の距離の維持などを実践しています。主日の出席率がかなり低下し、主日に教会に出席できなかった信徒たちに、毎週説教の原稿の韓国語版と日本語版を送付しており、青年たちにはカカオトークで送っています。教会の建築の借金を返済していますが、財政的に困難な面が見られます。

宣教委員会

リモート討論会を行う コロナ禍乗り越え、ポスト・コロナを展望

宣教委員会主催でZoomによるリモート討論会が、10月11日（主日）午後7時より2時間、牧師、長老、女性会から40人が参加して「コロナ禍を乗り越え、ポスト・コロナ時代を展望するKCCJ」の主題の下に「コロナ時代におけるKCCJ宣教の課題」という副題をもって行われた。

宣教委員長の金鐘賢牧師の司会で進められた討論会は、総会長の趙永哲牧師の挨拶と祈禱で始まり、主題講演は李元重牧師が、初代教会から現代までの伝染病における教会との関りと、韓国教会の状況や日本教会の状況からKCCJへの影響などを話され、これからの宣教の課題を講義された。

発題として京都教会の林明基牧師、大垣教会の蔡銀淑牧師がそれぞれの教会の状況を報告し、また問題点などを提案してから総合討論に入り、質問とこれからのKCCJ教会の宣教的な課題を分かち合った。(李元重牧師の主題講演は今月から3回に分けて福音新聞に連載する。)



東京第一教会

金恩英長老将立式挙行 10年間執事として奉仕し、長老に被擧

10月25日（主日）東京第一教会において金恩英長老将立式が行われた。

堂会長の林鮮享牧師の司会で開会した礼拝には、李明忠牧師による「キリストの体を造り上げて」（エフェソ4:11～14）という



題目の説教がなされた。

長老将立式には関東地方会長の金秉喆牧師の司式の下、紹介と誓約、按手祈禱と宣布が出された。

この度、長老按手を受けた金恩英長老は、1967年韓国で生まれ、2000年留学生として来日してから友人に導かれて東京第一教会に通い始め、2001年に受洗、2010年から署理執事として奉仕してきた。家族は夫と一女がいる。

呉光現執事（大阪教会）、 韓国政府から「冬柏章」受勲



この度、2020年在外同胞の日に韓国政府から国民勲章の冬柏章（ツバキ賞）をいただきました。大阪に生を受け60有余年、大学生の時にKCCJでの地域活動に出会ったことをきっかけに大阪教会につながり、洗礼を受けました。卒業後、幸いにも生野地域の教会が力を合わせて運営する生野地域

活動協議会、その後、聖公会が始めた聖公会生野センターで働き、社会人人生のすべてが教会と神様に見守られながらの歩みだったと思います。生涯の伴侶も青年会全国協議会の集まりで出会いました。

この度の受勲は、長年クリスチャンとして、教会としての働きとして、私が行ってきた生野地域での地域活動や在日同胞の人権運動、そして日本と韓国の交流事業などが評価されました。韓国との交流では大阪の障がい者福祉を紹介することによりソウルでもそのような働きが始まったことにありました。指紋捺捺拒否運動の時は日本政府と正面から向き合って闘ったことを懐かしく思い出します。

このような地味な活動や運動を評価して下さった韓国政府に感謝を申し上げたいと思うと同時に成熟した韓国社会を感じました。私の受勲が在日同胞の若い世代の励みになればと思います。大きなことだけではありません、目の前にある小さなことに寄り添って活動していくことが真に豊かな社会の創造につながっていくと信じています。

最後に私の好きな聖句です。子どもの心をいつまでも持ちつづげたいと思っています。

「はっきり言うておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」（マルコ10:15）

呉永錫長老（東京希望キリスト教会）、 韓国政府から「木蓮章」受勲



「与えなさい。そうすれば、あなたがたにも与えられる。押し入れ、揺すり入れ、あふれるほどに量りをよくして、ふところに入れてもらえる。」（ルカ6:38）

1983年家内と二人の子供は韓国に、一人ファッション流通の先進知識と技術の習得のために来日しました。31歳にして語学から始めた留学。母の祈りにささえられているものの私の信仰生活はとても褒められるものではありませんでした。しかし、主は常に共に歩んでくださり、右も左も知らない私を愛され、今日まで導いてくださっています。文化服装学院を卒業した1988年、初の外国人正社員として京王百貨店に就職しました。これによって韓日の流通の現場で様々な働きを許された方も主であります。後に韓国家庭料理という新たな業態を築き、キムチ博物館を通じて食文化の伝道の道を開いてくださったのも主であります。ディアスポラとして駆け足で走ってきた中で主は実に多くの人々を、私を助ける方として送ってくださいました。様々な、私にも想像すらできない道を切り開き、乗り越えさせてくださった主に改めて感謝と栄光をささげます。

もともと他人のことも見ぬ振りが出来ない性分の私は民団やYMCAをはじめとする様々な在日同胞コミュニティに席を置き、出来ることをこつこつやってきました。この度は2014年の発足時から2期5年に渡り奉仕をしてきた新宿韓国商人連合会の会長を退きながら身に余る受勲（国民勲章木蓮章）です。100歳時代を生きる一人としてまだまだ道半ばのゆえ少々気が引き締まる思いでもあります。これからも成すべきことは山のようにあります。今後ともこれらの課題にインマヌエルの主により頼み一つずつ向き合っていきたいと思っています。

川西教会

創立90周年感謝礼拝開く 《90年の歩み》記念誌を発刊

西部地方会川西教会において、去る10月11日の主日「教会創立90周年」感謝礼拝が行われた。

90年前（1930年）韓国の大邱から来日していた方聖元氏、鄭斗洙氏ら6人が、方聖元氏の住居で池田伝道所として礼拝を始め、カナダ宣教師のL.L.Young牧師の指導の下で同じ地域であった伏見伝道所と合併して川西教会が設立された。

2016年には西宮弟子教会と合併し、李重載牧師が赴任して委任された。



〈宣教委員会主催の「コロナ禍を乗り越え、ポスト・コロナ時代を展望するKCCJ」討論会主題講演〉

コロナ時代におけるKCCJ宣教の課題(上)

李元重（京都南部教会協力牧師）

1. はじめに

日本のコロナ感染確認者数は98,132人、死者は1,724人に達した。全世界では43,571,756人の感染者が確認され、死者は1,160,421人まで上がった(10月27日現在)。我々の周辺にもコロナに感染された人がおり、中には死者もいるだろう。しかし、コロナによる困難は感染者数と死者数の上、感染に対する恐れ、そしてこれを防ぐための社会全般の措置と統制、制限などによってより拡大した。その上、コロナ19はこれから人類の社会活動全般にわたって影響を及ぼすと多くの専門家は予測している。

我々みなが共感しているように、教会もコロナ19と防疫措置により大きな困難を強いられている。コロナ19によって起こった変化、そしてこれから起こりうることについては、我々のほとんどは、お手上げ状態である。筆者はただ、日本と韓国のキリスト教の歴史を勉強するものにすぎないが、在日大韓基督教会(Korean Christian Church in Japan、以下KCCJと略する)の一員として、我KCCJの足元となる韓国と日本のプロテスタント教会の現状の中で、KCCJが今この危機の際に取り組まなければならない課題についての所見を述べる。

2. 歴史における感染症と教会

実は、人類は常に様々な感染症と共に生活してきた。教会も歴史的にそうした伝染病を経験し、それなりの信仰と知識に基づいて対応してきた。

●初期教会

ローマ帝国は、紀元後165年、前代未聞の伝染病を経験した。約15年間ローマ帝国人口の1/3～1/4が死亡したと推定される。251年の伝染病でも莫大な人命被害をもたらした。ロドニー・スタークは、この2度の破滅的な伝染病の中で、キリスト教者の信仰と生き方によって、キリスト教がローマの公認宗教としての地位を確立するきっかけが作られたと主張している(Rodney Stark, The Rise of Christianity, 2015)。

その内容は第一に、キリスト教はこの災難についてより説得力のある説明をして人々にむしろ希望と情熱を吹き入れた。第二に、他のローマ帝国住民と違って、キリスト者たちは病人を見捨てずに、犠牲的な愛と連帯の心で彼等の面倒を見た。その結果、かえってキリスト者の中で、患者の生存率が圧倒的に高かった。非キリスト者から見たら、この生存率は大きな「奇跡」のようなもので、これによってキリスト教に入信する人も増えた。第三に、互いに助け合いながら生き残ったキリスト者たちの社会的ネットワークは依然として生きており、非キリスト者であっても自分たちの愛情と連帯の関係の中に受け入れた。この連帯関係の中で彼らは次第に自らキリ

スト者になったというのである。彼等は、キリストに対する信仰と愛の実践によって伝染病に勝ち、この世にも勝つたのだ。

●中世教会

14世紀半ば、ユーラシア大陸を襲ったペスト(Black Death)によって、当時欧州人口の少なくとも30%、多くは60%が死亡したと推定されている。このような人口の減少は、中世ヨーロッパの大きな変化をもたらした。中世ヨーロッパを支配していた教会とその信仰に大きな変化があった(Philip Ziegler, The Black Death, 1969)。

当時ペストに対して教会は、それが人間の罪悪に対する神の審判だと教えた。しかし、そのような説教を語った司祭たちも同様にペストにかかり、次々に死んでしまった。当時の人の目には、教会も神の審判から免れることができなかった。善良な司祭は信徒と共に死んでしまい、その代わりに不十分な資質の人が司祭に任命された。教会の礼拝堂と権力は取り戻されたが、ペストの災難から回復する過程の中で教会および既存の秩序と教理に対する人々の不信は大きくなった。人々は、ペスト以降「信仰の危機」を経験するようになった。

●スペイン風邪と教会

近代科学と医学の革命以来も人類は、パンデミックの伝染病を経験した。それが1918～20年、世界を襲ったスペイン風邪である。これによって、当時全世界人口の約1/3が感染し、少なくとも5千万人が犠牲になったと推定される。

以前の時代とは違って、医療の発展により過去とは異なるレベルの防疫が、国家の主導によって行われた。政府は多数の人が集まることを禁止し、学校や寮なども当分の間閉鎖する一方、マスクを普及させ、防疫センターや緊急治療所などを造った。多くの教会が正常に集まることはできなかった。教会の信仰活動が、国家の統制および政策との関係の中に置かれ、医学と科学によって評価されることになった。欧米諸国の場合、政府と社会の防疫指針に従う教会もあったが、教会の活動が感染を拡大する場合もあり、集会を禁ずる政府の政策に抵抗する教会もあった。

現在富坂キリスト教センターは「スペイン風邪と日本の教会」というテーマの共同研究を進めている。日本でも同期間、スペイン風邪によって45万人が死亡したと推算され、当然キリスト教教会も大きな打撃を受けた。しかしごく一部を除いて、ほとんどの教会、牧師、神学者においては、伝染病が彼等の信仰的、神学的課題にはならなかった。(次号に続く)

